

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.128

多摩風土記（旧府中宿高札場・御旅所）
府中市内で旧甲州街道と川越道、川崎道が交差するが、その南西角地に高札場（こうさつば）が遺されている。屋根があり、江戸時代には札掛けの木柵に、切支丹の禁止や徒党の禁止など、提書や触書を記した高札が掲げられていた。都内に現存するものは極めて少なく都の旧跡に指定されている。この場所は大國魂神社の御旅所でもある。（健介）

第三十五回俳句大会講演録より

私の現代俳句——兜太と鬼房



高野ムツオ

私が俳句を始めたのは小学四年生の頃で阿部みどり女の「駒草」への投句がきっかけだった。たまたま居合わせた句会でみどり女の選に入った。これを機に「駒草」に投句を開始し、高校の文芸部では詩作にも熱中。生意気にも文芸部の機関誌に「現代俳句小論」という文章を書いたこともあった。これからの俳句は現代を表現できることが大切で、有季よりも無季の俳句に可能性を見いだしたいという内容であつた。

私が金子兜太を知ったのは、たしか十八歳の頃だったと思う。

当時、私が最も魅力を感じたのは、昭和四十年前後に出版された金子兜太の『短詩型文学論』や『今日の俳句』だった。「海程」入会のきっかけともなった。とくに『今日の俳句』は光文社のカッパブックスの一冊で内容はもちろんだが、装丁が現代的でたいへん魅力的だった。むさぼり読んだことを覚えている。

もう一つ参考になったのが筑摩書房の「現代日本文学全集」の『現代俳句集』で金子兜太の他に佐藤鬼房、鈴木六林男、高柳重信など魅力的な俳句ばかりでこんな素晴らしい俳句があるのかと惚れ込んだ。

そんなことがきっかけとなり金子兜太に「海程」に入会希望の葉書を出したら、すぐに返事が来た。投句をしたら、また励ましの葉書が来た。句評も添えてある。うれしくなって東京の「海程」月例会に顔を出すようになった。

一方、鬼房との出会いは二十七、八歳の頃、宮城県栗原市での俳句大会でお会いしたことに始まる。その折、私が詠んだ句に

色鳥の声青空に滲み入る

がある。鬼房が、この句の小鳥は冬の小鳥の方がふさわしいと語ったのが今も忘れられない。

その数年後、鬼房の句集『地楡』の評を『海程』に書いた折、そのうち遊びに來いと葉書を貰った。ためらっていたが、初訪問の折は翌朝四時近くまで話し込んでいた。

昭和六十年に「小熊座」が創刊される。投句してもよいとお伺いしたところ、「あんたは止めとけ」と言われたが、文章連載の依頼が来た。一回目は入院先へ届けた。「もう来ないかと思った」といいながら「小熊座」の編集や選句に取り組んでいる姿が心に残った。そうこうしている内に小熊座の校正、編集にも携わるようになった。

鬼房が兜太と初めて会ったのは昭和二十六年十一月十五日。鬼房は当時社会性を求めて俳句を一人で作っていた。東北ではそうした俳句を作る俳人は誰もいなかった時代である。

兜太はレッドパーズの煽りで左遷同様、福島に赴いていた。共に俳句を語る相手に飢えていた。「一晩泊めてもらう」予定で福島の兜太邸に鬼房は出かけたが、実際は二泊した。帰る日の夕方まで、朝、阿武隈川をちよつと眺めたのと厠に立った以外は何時間も俳句の話が途絶えることがなかった。

兜太は「鬼房俳句の真髓」という講演を平成十八年二月二十六日に小熊座の招きでしてくれている。

兜太の講演は、まず福島の出会いから始まった。そして鬼房が半年前に上梓した第一句集『名もなき日夜』が大阪の「夜盗派」の俳人達にあまり評価されなかったエピソードを伝える。

「俳句を作りながら俳句形式を軽く考えていたと兜太は指摘する。しかし鬼房には俳句形式への信頼感、誠実さがあると言う。私はこれは鬼房であると同時に兜太自身のことであると気持ち始めた。

この講演の内容は私にたいする戒めでもあった。俳句形式を信じ己の表現形式として自覚し学び取れということである。

俳句形式を学び取ること、これは一回性である。つまり、一句なすごとに一回ずつ俳句形式と向かい合い俳句を学び取る必要がある。無自覚にただ五七五に言葉を委ねるのではない。

金子兜太の句、その代表句はそのほとんどが従来の俳句のセオリーをどこかで破っている。いや超えている。超えながらも間違いなく俳句伝統を担い屹立立っている。

金子兜太はそれこそ「一句一句」俳句形式と火花を散らし渡り合って俳句を生んできたのだ。その渡り合う場として考える日常があるとも強調した。

講演の感動は今も昨日のこのように覚えている。そしてその五日後に皆子夫人が亡くなる。いかに大切な時間を割いて話してくれたのか、今になってその有り難さに気付いている。

以下に当日の講演で紹介した兜太と鬼房の句を戦時の俳句、戦後の俳句、風土の俳句、エロスとスカトロロジーの俳句、晩年の俳句のジャンルに分けて記す。

戦時の俳句

魚雷の丸胴蜥蜴這い廻りて去りぬ
被弾のパンの樹島民の赤子泣くあたり
水脈の果て炎天の墓碑を置きて去る
夕焼に遺書のつたなく死ににけり
濛濛と数万の蝶見つた蕩る
捕虜吾に牛の交るは暑くるし

金子兜太

佐藤鬼房

おおかみに蛭がひとつ付いていた
むささびの夜がたりの父わが胸に
蝦夷の裔にて木枯をふりかぶる
陰に生る麦尊けれ青山河
冬蔵す季の重みや父の国
縄文の漁が見ゆ藻屑の火

佐藤鬼房

戦後の俳句

手の傷も暮しの仲間雪青し
青年鹿を愛せり嵐の斜面にて
暗闇の下山くちびるをぶ厚くし
彎曲し火傷し爆心地のマラソン
どれも口美し晩夏のジャズ一団
死ねば善人蟻一匹がつくる影
青年へ愛なき冬木日曇る
縄とびの寒暮いたみし馬車通る
戦あるかと幼な言葉の息白し
齡来て娶るや寒き夜の崖

金子兜太

佐藤鬼房

エロスとスカトロジの俳句
華麗な墓原女陰あらわに村眠り
最果ての赤鼻の赤魔羅の岩群
陰しめる湯浴みのあとの微光かな
野良猫のふぐりは白露三個分
草に糞まるここに家建てんか
生きてまぐはふきさらぎの望の夜
亜隆隆ほどの朝魔羅遠辛夷
白桃を食ふほの紅きところより

金子兜太

佐藤鬼房

風土の俳句

曼珠沙華どれも腹出し秩父の子
霧の村石を放らば父母散らん
沢蟹・毛桃喰い暗らみ立つ困民史
梅咲いて庭中に青鯨が来ている

金子兜太

佐藤鬼房

晩年の俳句

炎天の墓碑まざとあり生きて来し
福島や被曝の野面海の怒り
河より掛け声さすらいの終わるその日
またしても兵の一人として病死
終戦の日を南溟に生きてゐし
翅を欠き大いなる死を急ぐ蟻

金子兜太

あけぼの集

梅雨曇父の遺品をいかにせむ 国分寺 秋山ふみ子
逢ひたしと念ふ銀河の渡し舟 狛 江 浅見 玲子
担任の癖文字 黴の通信簿 摩 足立喜美子
酔芙蓉許し合える程でなく 清 瀬 穴原 達治
噴水のうしろに母が佇っている 稲 城 新井 温子
カラフルな遊具の眩し秋暑し 八王子 荒川勢津子
八月や祈るばかりの人の群多 摩 有坂 花野
点鬼簿をとび立つ気配 黒あげは 国分寺 安西 篤
^{ワープ}脱出せむ燃える地球^{ほし}より銀河へと小 平 石橋いろり
終戦忌七十余年の物語 練 馬 石原 俊彦
落ち鮎の命いたたく塩加減 八王子 市川 春蘭
なまくらな包丁叱り南瓜切る 青 梅 一ノ瀬順子
秋霖雨でもくらしーの浮いてゐる 狛 江 伊東 類
老鶯の声透き通る那須の山調 布 糸布 みこ
仔豚啼く農学校の野分 晴れ町 田 稻吉 豊
足馴らし揉む土踏まず 男 郎 花 練 馬 岩崎清太郎
マイカーを手放す老よ能登 薄暑小 平 植竹 利江
空わたるがらごろがらりはたた神 ^{東久留米} 上原 重一
帰るさに母より父の手掘り 芋町 田 宇賀いせを

手術後の夢のあやなす夏 暁かな 小金井 浮海 早苗
蜻蛉より小さき赤牛草 千里 西 東京 内田 牧人
新涼やもののいのちは目玉から 武蔵野 江中 真弓
鳥の巣に鳥いる平成最後の日 府 中 大井 恒行
虫の音をはさんで閉じる文庫本 立 川 大友 恭子
玉手箱秋の海にぞありぬべき三 鷹 大森 敦夫
新盆の兜太の眼 ^{ほのおぼし}火 星 昭 島 岡崎たかね
死ぬまでは兜太と居たい 曼珠沙華 武蔵野 岡崎 万寿
押せばごろん叩けばぽこんと 冬瓜 小金井 岡本 久一
朝未だき山猫の来る猛暑かな 飯 塚 奥野 亜美
目分量で生きて来た道 蟬の殻 国 立 長田 和江
おしろいの種採る火星遠ざかる 国 立 折原あきの
雲の峰ついと戦に突き当る多 摩 柏田 浪雅
穏やかにそして普通に 冷や奴 国分寺 加藤 道代
爽涼や鳩の視界の中に居る 稲 城 門野ミキ子
一筆箋繰る立秋の風 一枚 西 東京 金谷サダ子
八月十五日興安丸の緑十字 日 野 亀津ひのとり
薄暑かな改札口へ四十段 西 東京 河 順子
一山の紅葉のみこみ 湖朱し さいたま 河井 時子

あけぼの集

そこかしこ供花がありて秋の雨立 川川島 一夫
 地球狂う人また狂う秋暑し稲 城川田 忠雄
 言葉を黄葉するまで使ったか太 田川名つぎお
 爆竹の喧騒裡往く精霊船調 布菅 さだを
 母の背の小さくなりし芋水車清 瀬神崎 幸子
 生きて来しそれぞれの手や焚火の輪小 平城内 明子
 労いのことばさらりと敬老日練 馬岸本 陽子
 箸先にあはれ蝗の後肢八王子国枝金之助
 シャンプーの同じ残り香夜の秋武蔵野高坂 栄子
 碁敵に一矢報いるソーダ水東村山五藤 航
 神の座の青き稜線野分行く町 田小山 健介
 胸の火を幾度焦がし心太東久留米紺谷 睡花
 サンガラス異界の色を少し入れ西東京近藤 斗升
 強制換気強制揚水安全宣言立 川今野 修三
 認可外保育所おひるねの時間多 摩齊田 仁
 けふも来て翅を休める夏の蝶東大和境 英子
 立看板光と風の叫び消ゆ八王子櫻本 愚草
 水打って父の世よりの風を待つ東久留米佐々木克子
 かなかなや佛足石に水少し府 中笹木 弘

月光を浴び花のごと火焰土器八王子佐藤 健
 風鈴の音が薄闇引き寄せる調 布佐藤 茉
 ドンと腹祭太鼓の音が突く府 中佐藤八重子
 秋祭る灯が裏山の杉に点く青 梅沢田 改司
 見舞いし日何処ともなく花栗匂う八王子柴 れいこ
 迷走台風ヴァイオリン哭いている昭 島芝崎 綾子
 地球儀の埃を拭う原爆忌練 馬島 彩可
 茄子の花一番遠い昨日かな西東京白尾 幸子
 座敷童両手にいっぱい赤のまま調 布白戸 麻奈
 月下美人誉められたいは誰にかな世田谷鈴木 浮葉
 この猛暑災害廃棄の仮置場立 川鈴木かずえ
 孫の来て活気づきたる夏座敷小 平鈴木 寿江
 鰯煮て白身をほぐすその日まで練 馬鈴木りつ子
 スローバラードのかたちで新酒酌む町 田栖村 舞
 崩れると見せて膨らむ雲の峰板 橋諏訪部典子
 鉛筆の長短の束わが秋思小 平関 梓
 平らなり二百二十日の成層圏町 田関根 曳月
 スーパームーン鏡餅が飛びたがる武蔵野高野 公一
 軒のなき大東京の大夕立清 瀬谷村 鯛夢

あけぼの集

邯鄲と蟬が夢見る一夜かな 稲城 玉木 康博
 ジェット機の火星をよぎる半ズボン 日野 玉木 祐
 千葉産のブス梨の味が一番 東久留米 田村 實
 人生はたかが百年星月夜 三鷹 田山 光起
 災害の地を流浪せし鬼やんま 稲城 地原 光夫
 石は黙寄り添いたきは吾亦紅 八王子 辻 升人
 花サビタ私にもある反古の恋 東村山 寺尾 令子
 夫なくて大回遊のわれは 鯨立 川 遠山 陽子
 少年の顔に陰影 夏果てる 西東京 戸川 晟
 みんなを鳴かせて曙杉しずか杉 並飛永百合子
 初蟬かはたまいたつもの耳鳴りか 相模原 島海 高志
 過労死の蟻一匹に蟻集る 清瀬 永井 潮
 深閑と湖燦々と秋の空 町田 長澤 義雄
 夏座敷鴨居に並ぶ肖像画 八王子 中島 秀次
 行く当てをふと忘れけり 蟬時雨 小平 中條 啓子
 音のない語り豊かに夜の秋 西東京 中田とも子
 オスプレイ花野上空攪拌す 国分寺 中野 淑子
 老いてなおときめき残る 酔芙蓉座 間 長野 保代
 八月や何もなかつたやうに 海青 梅 中村ゆき子

稲妻の狙ひ定むる夜の鉄塔 武蔵野 夏目 重美
 手おくれと思ふあれこれ 梅雨の蝶 八王子 夏目 瑤
 身に入むや道路に小さき手向け花 町田 成戸 寿彦
 エーイヤサー 駅前広場の夏まつり 世田谷 西前 千恵
 ゲジゲジや墓に置かれて 安茶碗 昭島 西村 智治
 秒針の音のみ冴える八月は 多摩 拔山 裕子
 堂堂と庭の真ん中 羽拔鶏 三鷹 根岸 敏三
 冬草や片付けられない人 とある 三鷹 根岸 操
 被爆者と同じ齢を生きて 夏小平 野口 佐稔
 初茄子や夫はスマホを知らず 逝く青梅 萩原 芙沙
 木犀の若枝の小揺れ星が出る 東大和 橋爪 鶴磨
 深草の百夜の恋や露と消ゆ 武蔵野 蓮見 順子
 窓に薄明かり人の世の淋しさ 武蔵野 蓮見 徳郎
 油蟬楽屋で出番待っている 羽村 花貫 寥
 組板のリズム 正調秋立ちぬ 川越 原田 麦吹
 一位の実含む友より含まざる 青梅 樋口 光江
 竹夫人母にたてがみあるを知る 日野 日野 百草
 独り居の暮し見にくる鬼やんま 多摩 平山 道子
 ふわり巻く光の記憶 白木 槿横 浜 藤井 みき

あけぼの集

無欲とは祈りに似たり天の川鎌 倉藤倉 頼江
 色褪せし配給通帳八月来調 布藤原はる美
 漁り火のひとつとなりぬ流れ星練 馬淵田 芥門
 小鳥来る朝礼はじまる小学校八王子冬木 喬
 再びの生存証明夏便り多 摩星野 幸子
 パン生地に練り込む胡桃母の忌くる羽 村堀部 節子
 体育の日や勝虫の弓袋羽 村堀部 嘉雄
 草紅葉ふいに足許から笏国 立前田 弘
 さるすべり居づらくしたのは私国 立前田 光枝
 終戦忌語らず秘めしこと多し武蔵野松戸 圭
 櫓田の少年発光の腕もつ木更津松本 まり
 落葉径日暮は人を迷わせる八王子松元 峯子
 だれもない海辺の短い秋よ東久留米三池 泉
 夏の雲球音ひびく分校よ東久留米三池しみず
 風紋を踏み昼顔に会ひに行く小金井三浦 土火
 父にある行きつけの石青葉風世田谷三浦 文子
 午後四時の鬱というかガンジウム町田三木 冬子
 向日葵や健康家族のスニーカー国分寺水落 清子
 新生姜厨に入るる山の風三鷹水野 星間

蠍座や畑にばつくり洞窟の口日 野満田 光生
 立葵傘寿の姉のハイヒール小金井宮井 洋子
 ケーブルの六分間の青葉騷昭 島宮腰 秀子
 ボランティア玉の汗なり災害地小 平宮寺 幸子
 反戦を叫びし兜太天の川八王子三山 喜代
 立秋や髭を濡らして猫戻る小金井村井 一枝
 夜空をば狭しと乱舞の花火かな多 摩村山 良
 特売が枕詞の秋刀魚買う武蔵野望月 哲土
 秋場所のさじき珊瑚の髪かざり立 川山口 楓子
 何もできずただ青い八月の空町田山崎せつ子
 をみなにも七人の敵夕立雲東村山山崎美紗緒
 くさや焼く度胸もなくて夏終わる府 中山本 徳子
 瑞瑞し青葉の多摩に老いるかな多 摩山本みつし
 水葬の毛布一枚のこりけり府 中吉澤 利枝
 朝顔やちゃっかり木の枝借りて青東大和吉田雄飛子
 紫陽花の常套手段首を切る東久留米吉平たもつ
 一日の無為を咎むる残暑かな国立吉村春風子
 ちりとりに昨日と今日の凌霄花立 川米澤 久子
 猿山のサルノコシカケ天高し青 梅渡部 洋一

秋山ふみ子

母の日や難産だったかも知れぬ

永井 潮

一読して不思議な印象を受けました。中七からの措辞は色々な示唆に富んでいると思います。お母様への思い、生を享けた我が身への思い。「かも知れぬ」という表現により想像が広がります。「母の日」への直球の一句と納得しました。

足立喜美子

平和とはふつうの暮らし麦の秋

安西 篤

何とシンプルで幸せを感じる中七の措辞であろうか。この七十三年間、私達は戦争に巻き込まれる事もなく過してきた。「平和とは」寝て起きて食べて仕事なり好きなことをして、ふつうに暮らせる事に他ならない。「麦の秋」が絶妙。

新井 温子

振り向けば呼んでいたのは紫木蓮

境 英子

呼ばれたような気がして振り返ってみたが、そこには誰もいない。ただ紫木蓮が咲いているだけ。すこしがっかりだが、でも何故か納得。日常の何気ない行動を詠んでいるながら、紫木蓮が季語として、活き活きと効いていると思う。

有坂 花野

春日傘たためば本当の孤独

斉田 仁

人は一人で生まれ一人で死んでゆく。冬がすぎて春が来た喜びにそれを忘れていく。何かの拍子に、例えば日傘をたんでまぶしいばかりの陽光のもとにその身をさらすとき、否応なく生命の孤独を実感してしまうのである。

飯田 玉記

人生の平凡凡心太

根岸 敏三

現代では毎日が天災、人災、事件、事故と怖い話が茶飯事であるなかで、このお句のように、いかに「普通」が幸せであるかを痛感し、又一生をこんなふうに過ごせて行けたらとつくづく思いました。

飯田 浩子

栗咲くや犀うつうつと柵揺らす

近藤 斗升

自然のままの草地や湿地でのびのびと生きていたであろうものを、捕えられて動物園に囲われている。その心情を思えばうつうつと柵を揺らす行動もさもありなんと思う。ましてや季節は栗の花咲く頃。季語がぴたりと決っていると感じた。

池田 洸生

竹落葉領いてゐる笠智衆

稲吉 豊

これは松竹映画、小津安二郎監督のメガフォンによるモノクロ映画のワンシーンでありましょう。初夏の暖かい日差しに竹落葉を掃きながら娘役の原節子と領きながら会話している笠智衆、そんな昭和のノスタルジーに浸ってしまします。

石橋いろり

緑さす松本「草間彌生」展

菅 さだを

七月初旬まで開催していた松本美術館の草間彌生展は見応えがあった。前衛芸術家らしい極彩色の立体作品は皆伸びやかで、緑なす松本の広い空間に生き生きとした像が映える。地名と固有名詞だけでコアなイメージを結像。実験的な句。

植竹 利江

伝言板は既にまぼろし著我の花

三木 冬子

私が小学校の頃は駅に伝言板があり、よく覚えていた。まだ電話が各家庭に普及していない頃、地味な存在だったが、貴重であった。今、メールで連絡ができるようになったり、私も便利に使っている。情感のこもった句である。

上原 重一

前世はたぶんにんげん蠅生る

日野 百草

蠅が生れた直後を見たか、蠅そのものを見て詠んだ句だろう。ああ、自分も、そうありたいものだと考えた作者。生れ変わるなら蠅がいい、と想像したのか？私自身は、再生など真つ平だが、この想像は愉快なのだ。色々考えさせる。

宇賀いせを

蟻と戯る一万歩越えたから

新井 温子

七五五の十七音、少しも定型感覚やリズムクな調子が損なわれていない。助詞「から」の措辞の効果が大きく、句に一種のユーモアを添える。時速4キロの一万歩は、道端の、街中の風物を皮膚感覚で捉える。

浮海 早苗

合鍵を子らに持たせて曼珠沙華

梅沢れい子

楽しい家庭も子らが独立、そのうちつれあいに先立たれ、ひとりになる。私の周りにも多い。でも子らに頼らずにひとりで生き、俳句仲間とも楽しみ、今を生き切る。私が音信不通になったら、家の鍵を開けて。曼珠沙華の季語がとてもいい。

岡本 久一

横縞のTシャツが好き海を恋う

三池 泉

作者は、Tシャツの横縞に夏の海の水平線を見つけた。それはある夏の日のアバンチュールにつながる。なんて甘いことを言ったがそんなことであつてもなくてもやっぱ「海は母」なのだ。永遠に恋しい。結びの「海を恋う」が切ない。

亀津ひのとり

八月六日天井裏にイエス様

前田 弘

この句の前で立ち降り反芻しきり。一瞬の劫火に焼かれた市民と天井裏にあった十字架のイエスか、或いは全く別のストーリーか。句に触発されるものは七十三年経て尚拭いきれざる深い悲しみ、歎きまた神に対する問いかけか。明日は八月六日。

川田 忠雄

ふらここに夜風がそつと乗りにくる

中條 啓子

見事な擬人化句である。真夜中の公園だろうか、昼間、子供達と思う存分遊んだふらここは熟睡している。そこへ夜風が音もなくやってきて、静かに揺らしている。ふらここを癒しているのだ。楽しい句です。

紺谷 睡花

溪流の瀬音を集め夕河鹿

長澤 義雄

河鹿は河川の清冽な水を好むそう。それが「溪流の瀬音を集め」という措辞にいかにも涼しさを感じる。作者はそこに佇みしばしの憩いを得たのだろうか。都会の喧噪を逃れたひとときが、まざまざと目に浮び涼感を共有した。

近藤 斗升

青梅をごろごろ洗い恙なし

平山 道子

梅干を製するため青梅を洗っているのか。ごろごろの質感が快い。親の代からか、もしかしたらもつと以前からあるこの家のしきたりかも知れない。季節ごとの規範を守るささやかな暮らしに満足し、一家の恙ないことに幸せを感じている。

佐藤 茉

こどもの日こどものような父がいる

島 彩可

作者のふと呟いた様な現代仮名遣いに、父を思う優しさと寂しさを、諦観の滲む眼で大きく包み込む様な日常が思われ、母ではなく、父である事が胸を打つ。多分、大好きなお父様の今を受け止めた一句、と思いました。

白戸 麻奈

鈴木 浮葉

この和蠟燭にはどんな綺麗な絵が描かれているのでしょうか。その灯の中で百物語を始めるよとするモノは泉鏡花の戯曲にてでてくる妖しく美しい女性です。しかし、この美女に夢中になっていると、ロクでもない目に会います。

鈴木かずえ
風光る昭和を知らぬ親子づれ

白尾 幸子

昭和を生きた者として幼少より戦争の不安や苦しみを経験した。戦後七十三年、平穩に過すことの有難さをしみじみと思う。平成育ちの親が、おだやかな日々を幸せいっぱいには歩む光景が偲ばれ、ほほえましく思う。幸多かれと祈るのみです。

玉木 康博

亀津ひのとり

加齢も伴い、夏の暑さが私をうつむき加減にさせていました。この句で背筋を伸ばしました。中句が、肩越しに滑空する燕の姿をよくあらわしており、「夏燕」と表現したことも「一喝」の強さを示していると思います。

中田とも子
樹々渡る天狗を見たり青嵐

星野 幸子

ふと高尾山に行った時のことを思い出していました。頂上からは、新宿のビル群を眺め、葉王院では法螺貝を鳴らしながら帰ってくる僧侶に会い、滝に打たれている人を見ながらの下山道は、正に天狗さまに逢えそうなひとときでした。

夏目 重美

大森 敦夫

生氣に満ちた夏木立と、中七以下との対照が情感を醸し出す。「そのひと」は作者にとつて大切な人、「そのひと」の老いを夏木立の中で実感した瞬間を見事に詠みこめて切っている。下五を「真白くて」と止めることで効果的余韻を残している。

成戸 寿彦
硝子戸やこの頃来ない雀の子

鍵尾 美鶴

この句から、硝子戸の向うにいる人の姿が、まず浮かび上がってくる。「この唄えない雀の子」という措辞から、春から夏へと移りゆく「雀の子」の成長の季節感とそれを客観的に眺める人のやさしい眼差しがよく描かれた佳句と思う。

西前 千恵
平和とはふつうの暮らし麦の秋

安西 篤

いま世界中で人災は元より、天災も地震、水害、台風、猛暑と、ころろ安まらない日々が続いています。ふつうの暮らしが出来るこれこそが平和だと、作者の平和を祈る気持ちが「麦の秋」のあたたかなやさしい季語にこめられていると思います。

原田 麦吹

永井 潮

お父さん畑へ行つて大根取つて来てと、家庭菜園に。葉のよく繁つた丸々と太った大根、深く刺さつた大根はなかなか抜けたない。渾身の力を入れるが抜けない。左右に揺さぶる、やつと抜けたが力余つて仰向けに。今夜の風呂吹き。美味、滑稽、諧謔だ。

母の日や難産だったかも知れぬ

永井 潮

「だったかも知れぬ」ということは聞いていなかったはずだ。なのに難産と推測している。自らの現状か、成れの果てか、それとも出産に立ち会っただけか——何も説明することなく母の日の季題に掛かるだけの難産の一言、はつとさせられた。

平山 道子

つくしんぼ仲良きこともくたびれる

城内 明子

日常生活の中でのいろいろな関係性を、私達は絆といつて大切にしている。友人との仲も然り。だが加齢などと共に体力も少しずつ衰え、絆に向ける配慮の不十分さがストレスともなる。「つくしんぼ」から作者の複雑な思いがよく伝わってくる。

古川 夏子

沈黙も言葉のひとつ夕端居

吉村春風子

沈黙は金。台所あたりで妻がぶつぶつ何か言っている。聞いているような、ほんと聞き流すような珠玉の刻が流れる。縁に涼風、笠智衆が居るような昭和の一風景。

冬木 喬

ところてん言葉の要らぬ間柄

根岸 操

名優笠智衆の絶妙な会話の間について名画「東京物語」の脚本家野田高梧は、笠の無言の佇まい自体が言葉になつていと言っている。掲句でそれを思ふ。ここでの間柄には、静謐で豊かな時間が流れている。心太が所を得て動かない。

堀部 嘉雄

蟻と戯る一万歩越えたから

新井 温子

健康管理のため、毎日一万歩を歩くことに決めている。万歩計を覗くと一万歩を越えていた。これからは余禄の時間である。ふと、足元を見たら、蟻が懸命に行動している。忽ち虜になった。歩く眼から作句の眼に変わった作者が見える。

前田 光枝

前の人に隠れて覗くまむし草

沢田 改司

ご自分だろうか隠れて覗いているのは、それとも近所の子供たちの様子かしら。得意気に「これまむし草って言うのよ」と誰かが言った。こつちを向いている。ドラクエのデビルプラントのようなモンスター花を受け入れる時間が欲しい。

松戸 圭

ほととぎす時間とんどん透きとおる

山崎せつ子

時鳥の顕著な鳴き声を敢えて時間の流れに秘めて、辺りに清純な透明感を漂わせている。近隣の山林公園などで聞くその声は正に「ほつちよんかけたか」と語りかけてくる。万葉集を始め古歌にも多く詠まれている。作者の感性に脱帽。

三池 泉

旅先のメーデー固き茹で卵

小山 健介

次のメーデーに皇太子が天皇に即位するという。どうして?といたい。若い頃、メーデーの帰りに、国会議事堂の前で「岸を倒せ」というシュプレヒコールのジグザグデモに参加した。どこの旅先だろうか。メーデーに出会い、固い茹で卵がびつたり。

水野 三夫

清明やバタビヤの道に拾はれし猫

奥野 亜美

一読、大木惇夫の『戦友別盃の歌』を思った。「わが征くはバタビヤの街、君はよくバンドンを突け、」という有名な戦中の詩の一節。バタビヤとは蘭領時代のジャカルタのこと。猫の姿と椰子油の饅えたような独特な空気の匂いとが不思議に調和する。

宮井 洋子

麦秋の入曾をすぎてチェロの人

西村 賢治

入曾は西武線狭山市駅の一つ手前の駅である。新興住宅地だがまだ田園地帯の名残がある。乗客の少なくなった初夏の車内にチェロを抱えた人が居る、というその場が入曾である。明るく詩情のあるふれた佳句である。

大股も小股も一歩山開き
宮寺 幸子

渡部 洋一

ひんやりとした山の空気を感じながら一歩々々踏みしめて登った若き日の山歩き。あのとときの感覚がいま甦ります。もう、二度と登れない、山の楽しさを、思い出させてくれました。

麦熟れて『東方見聞録』の国
望月 哲士

折原あきの

マルコ・ポーロの頃の日本は豊かな金の産出国であったが、今やそうではない。しかし一面の熟れた麦畑を目にして、その眩い金色に、日本はやはり黄金の国と感じたのだ。物は考えようという作者の明るい性格が窺われて楽しい作品。

落ち着かぬ果物ナイフ雷しきり
山崎せつ子

岩崎清太郎

夕食後の団欒のシーンだろうか、卓の白い皿の上に果物ナイフが置かれている。果物が何かの表記はない。果物が主役ではなくあくまでナイフに重点が置かれている。折から雷鳴が何度も聞こえる。思わずナイフを見る。何かキラリとした様思った。

雨蛙はたと鳴きやむ暗さかな
豊 宣光

佐藤八重子

雨蛙は雨が降りそうになると鳴くという。その鳴き声がはたとやんだ。空は黒雲で覆われている。雨が近づいてきたのである。あるいは、すでに降り始めているのかもしれない。一瞬を切り取り、雨蛙と暗さを結びつけた感覚が鋭い。

蟻と戯る一万歩越えたから
米澤 久子

新井 温子

蟻にちよつかいを出した事があります。温子さんはウォーキングの一万歩を越えた時に、蟻を見つけてどの様にして戯れたのでしょうか。「蟻と戯る」と上七に置き、「一万歩越えたから」と意表をついた措辞のつけ方、大好きな句です。

我妻 民雄
死にたれば小蟹は潮へ身を合わす

三浦 文子

「身を合わす」は、古今和歌集(序)にある言葉で、帝と臣下とが歌聖人麿の歌により心をひとつにするの意であった。精神的意味合いが濃い。死んだ小蟹を万物の母である海が迎えにくる、いや海と身を合わすべく小蟹は死んだのだろう。

あけぼの便り

○未定だった秋の吟行会の句会場が決定しました。吟行地の都立武蔵国分寺公園に隣接した都立多摩図書館の二階セミナール室です。厳しい抽選を何とか勝ち抜き確保しました。皆さん、11月17日、ぜひ吟行に参加してください。(石橋いろり)

○本年四月より入会させていただきました。今回初めての投句です。どうぞよろしくお願いいたします。(石原俊彦)

○今年は厳しい夏でした。40.8度Cという高温記録の土地に住んでいるので、水をこまめに飲んでひたすら家に籠っていた日々です。でも、夜は虫の音に秋の気配を感じているこの頃です。(一ノ瀬順子)

○高野公一様、前号で拙句をお取り上げご講評いただきましたことに有り難うございました。こころ籠る評文、これからの励みになります。(植竹利江)

○ただいま、引き籠り実行中。もう、何が起こつてもたじろぎません。(奥野亜美)

○連日猛暑日が続きましたが、私は日中は巣籠り状態でした。夜の八時になるとパトロールを兼ねての散歩です。(五藤航)

○平成の終りの年というのに、何という異

常。猛暑続きの日々と、台風がよくまあ来ることか。宇宙の異常か！ 涼しい国が暑かったり、水害、大雨、台風、地震と何とも辛いニュースばかり。皆様どうぞご自愛下さい。平成の次は静かな年になって欲しいものです。

(玉木祐)

○かつて被災地を経験した自分には、今夏の日本各地の災害はまことに無残でお気の毒。しばし途方に暮れた少年の日の、今も脳裏によみがえる。

(地原光夫)

○今年の夏の暑さは格別でした。これが当たり前の夏になっていくと思うと怖いです。昔は冷房もありませんでしたが、自然の涼風が懐かしいです。やはり昔は良かった。

(飛永百合子)

○当会のイベントにいつも一番乗りで参加されつねに好成績を取められていた、木下蘇陽さんが今春亡くなられました。又、先の俳句大会でも入賞され、今号では作品が一句鑑賞に取り上げられている梅沢れい子さんも、入賞を知ることなく突然他界されました。当会をこよなく愛して下さったお二人のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(永井 潮)

○今年の「千両千両井月さんまつり」のシンポジウムは、『幕末維新伊那街道の夜明け』、井月俳句大会の講演テーマは

『井月と一茶』です。楽しみです。

(夏目重美)

○やりたいこと、書きたいこと、話したいことまだまだたくさんあるのですが、残っている体力と相談すると、手遅れ、残念と思うことの多いこの頃です。

(夏目 瑠)

○連日の猛暑に悲鳴を上げています。早く涼しくならないかなと願うばかりですが、どうぞお体お大切にお過ごしください。

(西前千恵)

○この夏の猛暑は、九十歳をとうに超えた我が身にはかなりのボディブローでした。でも、涼風立つ頃にはまたもとの元気になるかと思っています。

(原田麦吹)

○伊東類様、林みよ子様、127号で拙句をお取り上げ鑑賞くださり有り難うございました。大変うれしく存じます。お元気で過ごしてください。

(前田光枝)

○猛暑お見舞い申し上げます。一日一日、過ごすのが精一杯です。

(松元峯子)

○猛暑、酷暑、炎暑、遂に危険気象とまで言われる夏でした。熱中症に気をつけようと、庭の雑草の繁茂にも目をつぶって、もっぱらエアコンの効いた部屋で過ごし、100回記念の高校野球をテレビ

で楽しみました。

(三木冬子)

○岸本陽子様、127号で拙句を鑑賞していただきまして本当にありがとうございます。何よりの励みでございます。重い腰を上げ、終活をと思っています。

(水落清子)

○俳号を現役時代から職場の句会で使っていた星闇に改めます。初学の頃、傾倒した蛇笏の高弟松村蒼石の「寒月のひかりにとほき星の闇」から戴いたもの。

(水野二三夫)

○図書館のリサイクル図書で、矢島渚男さんの『与謝蕪村散策』を手に入れ、毎日読んでいますが、教えられることが多いです。蕪村は苦勞人であり優しい父親でもあったようです。

(宮井洋子)

○皆様、長い間お世話になりましたが、この度、同居の息子が突然再起不能の病に倒れて、四月以来入院、完治の見込みはありません。皆様との楽しかった思い出を忘れません。今年いっぱいでお別れます。本当に有り難うございました。

(三山喜代)

○前号で私の句をご鑑賞下さいました加藤道代様、有り難うございました。編集の方々のご健康祈り上げます。

(山崎美紗緒)

第36回東京多摩地区

現代俳句協会俳句大会

平成30年7月29日(日)

於・武蔵野スイングホール

異例の進路を辿る台風に気を揉むなか、東京多摩地区現代俳句協会・俳句大会が開催された。出句者一九九名、投句数一〇七四句、当日出席者八八名と盛会であった。大森敦夫事務局次長の司会により恒例の会歌斉唱、根岸敏三副会長の開会の辞、吉村春風子会長の挨拶があり、本日の講師、高野ムツオ先生からご挨拶句を戴いた。

台風のしつぽにつかまり多摩に来た

続いてご来賓の松澤雅世都区協・会長、

尾崎竹詩神奈川県協・事務局長、並木邑人千葉県協・幹事長の各氏よりご祝辞を賜りました。金子兜太先生に黙祷を捧げ、現代俳句協会副会長・小熊座主宰の高野ムツオ先生による記念講演「私



高野ムツオ先生の講演



来賓の並木さん、尾崎さん、松澤さん



大会賞・かわにし雄策氏 左は吉村会長



会場風景

の現代俳句「兜太と鬼房」があった。句の心情を深く掘り下げ、俳句は混沌が大切で、「創造であり、自然から学び、自分で跳きながら探る」との熱いメッセージを戴いた。また会場に兜太、鬼房の墨蹟が展示され参加者の目を惹いた。

休憩後、石橋いろり事業部長から成績発表があり、大会賞はかわにし雄策氏が受賞された。30位までの入賞者も顕彰し、かわにし氏が謝辞を述べられた。続いて大会選者の特選句披露に移り、特選賞が各人に授与された。大会選者各氏からの特選句についての講評も頂いた。

ついで各部からの報告と行事案内があ

り、最後に戸川晟副会長の閉会の挨拶により大会は滞りなく終了した。引き続きの懇親会ではご来賓の方々を囲み、和やかに交流の輪が広がり、また現俳出版部長の津高里永子氏から句集上梓をお考えの方には本部出版部がサポートする旨のご案内を頂き、懇親会も名残を惜しみつつ散会した。

(関梓・記)

第36回 俳句大会 入賞作品

〈大会賞作品〉

肩書きがふわつと取れて草の絮 かわにし雄策

〈入賞作品〉

大根を引き大根に倒さるる 永井 潮
日向ほこニユースがニユース消して行く 原田 洋子
すでに名で呼ばれし胎児春近し 菅沼 淑子
蛸の他は無口な村境 地原 光夫
風船やぶつかりあひて傷つかず 根岸 操
晩年の素顔の軽さ藍浴衣 遠山 陽子
耕せる限りの棚田盆の月 宇賀いせを
紙風船突けば昭和の音がする 一ノ瀬順子
句読点打つても打つても春の夢 島 さくら
炎天や負けて他校の校歌聞く 満田 三椒
省略が効きすぎている羽抜鶏 冬木 喬
つぶやきの形と思ふ木の実かな 秋山ふみ子
これ以上伸びない手足藤寝椅子 飛永百合子
ネギ坊主横並びにはもう飽きた 村井 一枝
達者かと電話のむこう咳ひとつ 松本 芳
どくだみの競わぬ白にして孤独 関戸 信治
田を打つて土の匂ひを持ち帰る 広瀬 元幸
夏草や可愛い年寄なんて無理 藤倉 頼江
タンポポの光持て来る見舞の子 吉田 久美
跡取らない田舎山子が意地を張る 桑田 制三

もの言ふを藁に待たれてをりにけり 市川 山猿
墓洗うだけの帰郷や駅弁買う 梅沢れい子
死ぬときも怒つてゐます原爆忌 原田 麦吹
与太兜太母のふところ山笑ふ 山口 楓子
大仏の背中で遊ぶかたつむり 沢田 改司
点滴や春光あつめあつて落つ 水落 清子
するすると桃むけただけ二重丸 島田 啓子
今日無事の夏大根の辛さかな 越前 春生
しがらみを抜け陽炎になつてゐる 佐々木克子

〈大会選者の特選句〉

高野ムツオ 選
緑さすびニール傘の無名性 平山 道子
松澤 雅世 選
大好きと好きの窪みに春一番 島田 啓子
尾崎 竹詩 選
日向ほこニユースがニユース消して行く 原田 洋子
並木 邑人 選
アカシア散る紙の鍵盤鳴るように 石橋いろり
沢田 改司 選
母の日のささやかなれど予約席 戸川 晟
橋爪 鶴麿 選
貼り紙の角のめくれて夏が来る 山崎せつ子
安西 篤 選
逝き方は生き方のメさくら咲く 永井 潮
岩崎清太郎 選
若葉風パン屋の広い硝子窓 梅沢れい子

岡本 久一 選
冬草や片付けられない人とある 根岸 操
金谷サダ子 選
一睡の中を幾たび桜咲く 高野 公一
田村 實 選
紙風船突けば昭和の音がする 一ノ瀬順子
地原 光夫 選
借景の春がベンチに置いてある 山本 敏倅
遠山 陽子 選
耕して大地に耕されてゐる 永井 潮
冬木 喬 選
雪しん国 雪しん国の出口が見付からない 原田 洋子
前田 弘 選
昼顔に同じ声掛け同じ顔 前田 光枝
寒卵割れば飛び出す小宇宙 関根 正義
三池 泉 選
死ぬときも怒つてゐます原爆忌 原田 麦吹
柏田 浪雅 選
孕み子に手足の揃う日永かな 鈴木 砂紅
江中 真弓 選
ほととぎすどんどん時間すきとおる 山崎せつ子
三浦 土火 選
山の子のあいさつしかと青胡桃 青木 絢子
佐々木克子 選
朝顔の紺のとけゆく隠岐の海 三浦 土火
水野二三夫 選
レーザーで謎解く古墳星流る 平田 修

吉村春風子 選

えご散るや昭和平成見尽くして 佐々木克子

根岸 敏三 選

達者かと電話のむこう咳ひとつ 松本 芳

永井 潮 選

ネギ坊主横並びにはもう飽きた 村井 一枝

山崎せつ子 選

どくだみの競わぬ白にして孤独 関戸 信治

稲吉 豊 選

もの言ふを藝に待たれてをりにけり 市川 山猿

戸川 晟 選

若竹や靴特大の娘婿 田山 光起

小山 健介 選

春愁はホチキスで留め外に出でよ 山下 遊児

大友 恭子 選

落椿毎朝拾ふおばあさん 田村 實

根岸 操 選

南から北から弔歌麦の秋 武良 竜彦

蓮見 徳郎 選

大根を引き大根に倒さる 永井 潮

石橋いろり 選

錆声の海女が浮出る雲の峰 地原 光夫

大森 敦夫 選

昼炬燵母の飴缶ふた開いて 池田 洸生

第6回 俳句研究会

6月23日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 根岸敏三 夏目瑠 秋山ふみ子

玉木康博 根岸操 戸川晟

石橋いろり 飛永百合子

参加者40名

★講話……川島一夫氏

「自己変革と俳句の進展」

この家も英字表札濃あじさい 門野ミキ子
ふんわりと時間が浮いて合歡の花 山崎せつ子
栗の花苦手な人を遣り過ぐす 関 梓
高々と雨を上げた蓮の花 高野 公一
未来とは大きな刺の茄子の花 川島 一夫
茅花流し何度も使う茶封筒 前田 弘
一幅の墨絵の匂う夏座敷 紺谷 睡花
ときめきは不意に来るもの夏座敷 吉村春風子
愛犬がじつと動かず蛭狩り 玉木 康博
黒南風や図書館よりの督促状 秋山ふみ子
女にも覚悟はありぬサンングラス 二本松よし子
どうしてを飲み込んでいるレモン水 戸川 晟
時の日や掃除ロボットまた転進 稲吉 豊
荒梅雨や言葉少なくて聞上手 大森 敦夫
晴れ男雨の菖蒲を誉めちぎる 飛永百合子
ゴミ袋下げどくだみの香を連れて 松元 峯子
沖繩に住めば分かるか慰霊の日 永井 潮
白鷺の片足立ちの思案かな 山口 楓子

風掬え風の押しだす青田波 河井 時子
額の花百の石仏百の顔 水落 清子
角帯の風切る姿杜若 佐藤八重子
梅雨晴間動物たちの向かう場所 前田 光枝
ボウフラがダガシダガシエーホッホー 淵田 芥門
武蔵野に余生つくろふ鉄線花 大友 恭子
手遅れと思ふあれこれ夏の蝶 夏目 瑠
女王蟻次の方舟待つつもり 関根 曳月
あちさるの今年のいろをよしとせず 亀津ひのと
万緑や鏡の中にある故郷 佐々木克子
扇風機前を陣取りフィットネス 根岸 操
自動ドアならず真夏のローカル線 水野二三夫
梅雨空や一つのことば迷宮に 石橋いろり
化粧とふかなしき言葉鮎の宿 柏田 浪雅
生きるとは拳の綱や沖繩忌 夏目 重美
天頂の月に歌々大西日 長澤 義雄
梅雨寒のちつとも減らぬ大ジョッキ 三浦 土火
予報官指示棒の先梅雨前線 根岸 敏三
荒梅雨や太字の長寿健診書 西前 千恵
蛭飛び廃炉ゆらめく時流る 櫻本 愚草
浜木綿に吹かれて今朝は油壺 大槻 正茂
優しさは試練経てこそ梅雨昏る 飯田 玉記

第7回 俳句研究会

7月28日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 水野二三夫 夏目瑠 秋山ふみ子
飛永百合子 根岸敏三 大森敦夫

佐藤八重子

参加者28名

★講話……小山健介氏

「多摩風土記を書いて」

涼しさは埴輪の腰のくびれかな 根岸 操
かなしみの当たりどこなし冷奴 越前 春生
虫の音をはさんで閉じる文庫本 大友 恭子
塩を舐め中止と決める神輿渡御 小山 健介
炎天や一罍二罍遠くなる 根岸 敏三
立葵傘寿の姉のハイヒール 宮井 洋子
山の風入れたポケット鰯雲 水落 清子
臍曲る野分接近多摩句会 三浦 土火
一八や正座の母が兄叱る 佐藤八重子
おまごとしていた八月十五日 飯田 玉記
バス停は森の入口蟬しぐれ 秋山ふみ子
青芒風のうわさは信じない 佐々木克子
手火花や母を受け継ぐ片糸くぼ 稲吉 豊
古代蓮見るたび一つ若返る 永井 潮
牧場の牛の反芻雲の峰 戸川 晟
べらぼうめえどぜう丸鍋熱燗でえ 淵田 芥門
朝顔をとりどり咲かせ四世代 関 梓
異常とは始まりのとき熱帯夜 川島 一夫
さるすべり白い嘘ならすぐ忘る 前田 弘
着地点目ざす青鷺風を呼ぶ 白尾 幸子
ひとしきり風の梳きゆく半夏生 吉村春風子
かなかなや今日仕残したこといくつ 山崎せつ子
一睡の夢まさびしく散蟬 水野二三夫

第8回 俳句研究会

8月25日(土) 武蔵野市かたらいの道・市民スペース

担当幹事

夏目重美・夏目瑤・秋山ふみ子
根岸操・石橋いろり・関 梓

参加者 39名

★講話……三浦土火

「土火俳話

「ゴカイのたわごと」

追伸の本音 一行夜の秋 越前 春生
病葉をむしりなんとなく孤独 松元 峯子
象徴の老ゆる背丸し敗戦忌 宮井 洋子
シャンブーの同じ残り香夜の秋 高坂 栄子
新涼やすつくと高きシェフ帽子 稲吉 豊
老々介護出来る幸せ小鳥くる 水落 清子
少年の顔に陰影夏果てる 戸川 晟
鉛筆の長短の束わが秋思 関 梓
東京の空が窮屈糸とんぼ 新井 温子
何もできずただ青い八月の空 山崎せつ子
母の忌や隠岐へと海霧の十三里 三浦 土火
みんなを鳴かせて曙杉しずか 飛永百合子

窓といふ窓開け放つ涼新た 山口 楓子
一日の無為を咎むる残暑かな 吉村春風子
紅一点弾ける末つ子鳳仙花 佐藤八重子
死ぬときも我流を通し百日紅 前田 弘
人は人吾れは吾れなり盆踊 鈴木 浮葉
遣影でしか会えぬ父親終戦忌 石原 俊彦
選ぶなら脇役がよし秋鰯 根岸 操
口寄せをしつてくれそうな月夜茸 藤井 みき
羅や喪主の安堵の透けて見ゆ 永井 潮
再稼働牡丹燈籠灯を入れる 櫻本 愚草
秋めくや銀座の夜の縄暖簾 長澤 義雄
銀河系のこの片隅の五・七・五 石橋いろり
片つばの耳は蛸いとでんわ 淵田 芥門
それぞれの看取りの話秋日影 秋山ふみ子
夏果ての身に添う影をもてあます 佐々木克子
嵐去り忿怒のごとき雲の峰 夏目 瑤
目標変更の果てのいのちや長崎忌 亀津ひのとり
水神よ海山彦よ鎮め夏 玉木 康博
まくなぎを連れて西より大男 柏田 浪雅
青春のよみがえる夏甲子園 西前 千恵
雑貨屋のコーヒーガムや秋澄めり 大森 敦夫
装ひの力を借りし秋暑かな 真壁 正江
浜木綿や砂丘を渡る風のはて 大槻 正茂
通学路目立つことなし赤のまま 根岸 敏三
林間にもろもろの声夏了る 水野二三夫
金子兜太の声あるラジオ野分来る 小山 健介
坪庭の白砂眩しき竹の春 夏目 重美

事務局だより

★秋の吟行会

日時 平成30年11月17日(土)
場所 都立武蔵国分寺公園
交通 JR西国分寺駅徒歩7分
集合 西国分寺駅改札9時30分
句会場 都立多摩図書館セミナー室 1時より
(詳細は別紙をご覧ください)

★平成31年度定時総会 並びに陽春俳句会

日時 平成31年3月30日(土) 午後2時
会場 武蔵野スイングホール
JR武蔵境駅北口徒歩2分
(詳細は別紙をご覧ください)

★会員の現況(9月末現在)

304名(正会員244名・一般会員60名)
☆新入会員 5名(敬称略) *印は正会員
*中島ひで(八王子市) 石原俊彦(練馬区)
*菊池美知枝(町田市) *安達昌代(小平市)
*石川春児(多摩市)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(申し込み手続き不要)。それ以外の方は年会費2千円です。お問合せ・ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

◇◇◇ご案内◇◇◇

俳句研究会

第11回 11月24日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター
立川駅南口徒歩13分

(とじ込みはがきの地図参照)

電話042・5229・8682

第12回

12月22日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

第1回

1月26日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

*講話 夏目重美氏
(いずれも会費五百円、出句三句)

〈在宅句会〉(投句参加)

▽開催日の一週間前までに投句してください。

▽出句は一人三句です。(選句はありません)

▽20×3cm程の短冊に一句ずつ書いてください。

▽参加費は千円です。(出句時にお送りください)

▽句会終了後、全作品の得点入り清記用紙と高

点句、出句された作品の成績、寸評等をリポートとしてお送ります。

(投句先) 〒180-0006

武蔵野市中町3-29-19 蓮見 徳郎方

「俳句研究会」投句係宛

編集後記

☆鶉の声は時に賑やか過ぎると感じるが、そのうち空飛ぶ車が出現するとか。頭上は騒音ではなく鳥たちの声で充たされたい。(梓)
☆実家の老々介護の手伝いで度々郷里に帰っている。観光地化の裏で地方の衰退が進むのを感じ。そういう現実も句に詠んでいきたい。(光)
☆あんなに暑かった夏も、過ぎ去ってみると妙に懐かしささえも感じる。紅葉の秋、食欲の秋、吟行の秋、じっくり味わってみたい。(百)
☆朝夕の犬の散歩では、季節の移り変わりが分かり、つと季節語に気付かされることが多い。つづく、俳句をやっていたことに感謝。(せ)
☆性的少数者を表すLGBTが注目されている。今年広辞苑に載り訂正文が出されて話題になった。LGBTはそれぞれの性的指向、Tは性自認の問題と言う。俳句も、異性の立場で作られた句があるが、どうなのだろう。(潮)

―題字は三橋敏雄氏―

平成三十年十月二十四日発行

発行人 吉村春風子

編集人 永井 潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒195-0055 町田市三輪緑山1-28-19

TEL 044-987-1716 稲吉 豊方

印刷所 株式会社 清水工房

TEL 042-620-2626